

中学校における国際交流の在り方

— Exploris Middle School・Odyssey School・MENDOYO SMP4との交流を通して —

浜岡 恵子 松村 健 山崎 学肖 檜和田祐介
(研究協力者) 林 孝 朝倉 淳

1. はじめに

広島大学附属東雲中学校（以下、本校）では、これまで外国の中学校3校と姉妹校提携し、国際交流を推進してきた。グローバル社会においては、自分自身をしっかりと見つめ、多様さに対して寛容な態度をとりながら、世界に貢献できるようになることが必要である。本校では、姉妹校提携による国際交流の推進に、国際社会で活躍できる基礎となる資質や能力、態度を育成することを目指し、とりわけ、①自己理解・他者理解、②地域（広島）理解、③国際理解・国際交流の育成を目的として、3年間系統的に取り組んでいる。

この国際理解・国際交流の推進に、国際交流プログラムの開発や工夫に焦点の置かれた研究は多い。しかしながら、生徒が交流を通してどう変容したのか、また、その変容した要因と国際交流プログラムとの関係を明らかにする研究は管見の限り希少である。

そこで本研究は、本校でこれまで行ってきた国際交流プログラムの実践を事例として、本校生徒の言語・コミュニケーションに対する意識と他者理解（異文化理解）・自己理解（自国文化理解）にどのような影響を与えているのか、その成果と課題を明らかにすることを目的とする。また、本校における国際交流プログラムを経験してきた3年生の意識を分析考察することによって、本校の国際交流プログラムが生徒に与える影響を分析し、その成果と課題を数量的に補足する。以上を通じて、効果的な国際交流プログラムの在り方についての知見に示唆を得たい。

なお、意識調査については、広島大学附属三原中学校（以下附属三原）の協力を得て、附属三原と本校の3年生を対象に国際交流に関わるアンケートを実施している。附属三原は、幼小中一貫教育を推進し国際理解教育にも先進的に取り組んでいる学校であるが、本校のような姉妹校との交流を行ってはいない。

2. 姉妹校の概要と交流の経過

(1) Exploris Middle School

Exploris Middle School（以下Exploris）はアメリカカノースカロライナ州ローリーにあるチャータースクールである。2001年に本校と姉妹校提携を結び、2003年より教職員・生徒の相互訪問、交流を開始した。

毎年Explorisの生徒約8名が2名の引率教諭とともに3月に来校している。Explorisの生徒は、本校生徒宅にホームステイし、学校で通常の授業や部活動、平和記念資料館での平和学習、特別支援学級との交流会などに参加している。2011年度には、広島市立古田中学校の生徒会4名、本校生徒会4名、Explorisの生徒8名で「学校の誇り」をテーマにミーティングを行い、本校のみならず近隣の中学校へも交流を広げている。

毎年8月に本校からも生徒約8名が引率教員とともに渡米している。8名の生徒の選考方法は、渡米の目的を書かせる作文や英語面接などを行い、選考している。渡米の際には、生徒は日本文化の紹介やリサーチクエスチョンを行ったり、通常授業に参加したりしている。また、引率教諭は授業を行ったり、Exploris教員と意見交換会などを行ったりしている。

(2) Odyssey School

Odyssey School（以下Odyssey）はアメリカカリフォルニア州サンマテオにある私立の学校である。いわゆるgiftedと呼ばれる生徒を対象に独創的な教育活動を展開している学校である。Odysseyは卒業旅行で毎年来日し、宮城、東京、京都、広島などを訪問している。日本語が必修教科で、日本文化や政治について学んでおり、ひらがなを書いたり読んだりする生徒がほとんどである。本校とは2007年より毎年、宮島にて1日の交流活動を行っている。宮島での活動においては、「宮島てらこや」^{*1}の協力を得て、「お箸作り」や「も

みじまんじゅう作り」を一緒に行ってきている。また、「ディスカッション」活動において、これからの交流の可能性について意見を出し合ったり、Odysseyで行われている授業を体験したりしている。

2010年度に姉妹校提携を結び、本格的に学校間交流を開始した。そして、Explorisとの交流と同様にOdyssey生徒8名が本校生徒宅にホームステイし、本校の通常授業に参加したり、総合的な学習の時間でお互いの学校精神についてディスカッションしたりした。さらに今年度には、本校生徒8名が引率教諭とともに渡米し、Odysseyの通常授業を体験した。

(3) MENDOYO SMP4

MENDOYO SMP4 (以下MENDOYO) はインドネシアのバリ島ジュンブラナ県にある中学校で、全校生徒約400名で全12学級、教職員数は校長・副校長を含めて27名の規模である。グローバルパートナーシップの確立を重点目標としており、生徒に国際的な視点を持たせ、また教師の国際的な知見を増やすことをめざし、ジュンブラナ県行政の指導の下で国際交流プログラムを推進している学校である。カリキュラムは日本の中学校とほぼ同じであるが、国際交流を推進しているため、多くの外国語を学習しており、その中に日本語が必修教科として位置づいている。また、クラブ活動では、ガムランなどの民族楽器を用いた舞踊、日本の「よさこい」を取り入れたダンスを行うチームがあり、年間数回ほどアジアやヨーロッパなどで公演している。日本には広島で行われるフラワーフェスティバルのパレードに参加したりしている。

本校との交流は2009年度に、教員間の訪問からスタートした。両校の教員が学校に訪問し、協議を繰り返した結果、2010年度に本校と姉妹校提携を結び、学校間交流を開始した。毎年5月に来日し、インドネシアの伝統舞踊の披露や、通常授業への参加、特別支援学級との交流などを行っている。

3. 本年度の交流プログラム

2011年度は、MENDOYO来日交流（5月）、渡米交流（8月）を行った。3月にはExploris来日交流を予定している。2010年度は、Odyssey来日交流（5月）を行ったが、今年度は東日本大震災の影響もあり、中止となった。渡米交流（8月）では、従来行ってきたExplorisとの渡米交流にOdysseyとの交流も加えた日程に変更し、交流の場を広げた。

(1) MENDOYO来日交流

1) 交流実施日

2011年5月6日(金)、7日(土)

2) 交流プログラム

今回来日したMENDOYOのメンバーはジュンブラナ県知事、県職員3名、教諭2名、生徒6名（男子4名、女子2名）で構成されている。2010年度と同様に、ホームステイはせずに、学校での交流のみを行った。各クラスに1名ずつ配属されたMENDOYO生徒に対して、授業者や隣席の生徒が英語でサポートしながら通常授業等に参加した。

交流の前には、本校3年生を対象に、広島大学の留学生を招いて、インドネシア文化についての授業を行い、インドネシアの生活、習慣、文化などを学習した。そこで出た疑問等を交流時の総合的な学習の時間で質問し、両国の生活、習慣、文化などについて意見を交換した。

午後にはMENDOYO生徒による伝統舞踊の披露を本校の全校生徒を対象に行った。参加型の披露であったため本校生徒は一緒に踊り、インドネシア文化を直に体験することができた。

表1 MENDOYOとの交流プログラム

月日(曜)	活動内容
5/6(金)	〈午前〉 ・Welcome Ceremony ・クラス歓迎会 ・配属クラスで授業参加 〈午後〉 ・総合的な学習の時間（3年）における意見交換会 ・インドネシアの伝統舞踊披露
5/7(土)	〈午前〉 ・配属クラスで授業参加 ・特別支援学級との交流 ・Sayonara Ceremony

3) 総合的な学習の時間（3年）

前述したように、事前学習での疑問についてインタビューしながら、インドネシアの生活、習慣、文化などについて学ぶことを目的として授業をすすめた。その際は、日本語を話せる通訳の方を通して、意見交換会を進めた。これは2010年度の意見交換会の反省に基づくものである。すなわち、2010年度においては小グループに分かれ、テーマを決めて意見交換会を行ったものの、お互いに母語ではない英語を使ったコミュニケーションが生徒にとってハードルが高く、言語の負

荷が大きいという課題を改善したものである。

〈本校生徒が作成した質問内容例〉

- 学校生活・教育・学習
 - ・体育祭の有無について
 - ・部活動の有無について
 - ・1日の授業時間数とテストについて
 - ・学習している教科について
 - ・学習に対する興味・関心について
- 習慣・文化・宗教・行事
 - ・結婚式の参加者について
 - ・宗教的に食べてはならないものについて
- 衣食住
 - ・日本食に似た食事について
 - ・家庭での生活について
 - ・人気のある食べ物について
- スポーツ・芸能・流行・遊び・娯楽
 - ・余暇の過ごし方について
 - ・流行しているものについて
 - ・芸能人（アイドル）について
 - ・ギャンブルの有無について
- 社会問題・政治・経済・環境
 - ・環境問題の有無について
 - ・公務員の給料について
 - ・就職活動について
- その他
 - ・有名な観光地について



写真1 総合的な学習の時間（3年）の意見交換会

4) 成果と課題

本校生徒にとって、インドネシアはあまりなじみがなく、その生活や文化などを詳しく知っている生徒は多くない。そのために広島大学の留学生を招いて行った事前学習では、日本との違いに驚きを隠せない生徒も多くいた。そのため、インドネシアについてもっと

知りたいという意欲が醸成され、MENDOYOとの交流の際にもすすんで質問する生徒がいた。その点からも事前学習を位置づけたことはMENDOYOとの交流で本校生徒がそれぞれ目標を持って活動に参加ができ、有益であったと考えられる。また、意見交換会では、前述のように生徒一人ひとりがかなりの数の質問を準備できたため、本校生徒の異文化に対する理解が深まったと思われる。さらに、2010年度の課題であった言語の負荷についても、通訳を招聘することで解消することができ、スムーズに両国の生活、習慣、文化の交流ができた。

しかし、本校全生徒が知りたかったことをすべて得られたわけではない。今回は、MENDOYO生徒6名に対して本校生徒80名が質疑応答をするということで、質問ができなかった生徒も大勢いる。友人から出される質問を通して、インドネシアについて学習を深めることができたが、通訳を通しての交流のため、一問一答になりがちで話を深めにくい点は課題である。

今後の交流の在り方として、言語の壁を越えてふれあえるような活動や遊びを中心とした交流を通して、直に異文化を体験するとともに、日本の文化を伝えるような形をとることによって相互理解を深める可能性を検討していきたい。



写真2 インドネシアの伝統舞踊を踊る本校生徒

(2) 渡米交流

1) 交流実施日

2011年8月22日(月)～9月1日(木)

2) 交流プログラム

今回渡米した本校生徒は8名、引率教諭は2名である。渡米までに8名の生徒を対象とした8回の事前研修会で渡米の目的、リサーチクエスションの検討、日本文化紹介の準備を行った。

渡米先で生徒はExploris、Odysseyの通常授業に参加し、放課後はホストファミリーと活動した。では、「ふ

ろしきの使い方」, 「箸の使い方」, 「年賀状作成」, 「歌遊び (はないちもんめ)」の4つの日本文化を紹介した。引率教諭は俳句と裁縫の授業を行った。Odysseyでは、滞在日数が少なかったため、通常授業への参加のみの交流となった。

表2 渡米交流日程

月日(曜)	活動内容
8/22(月)	ワシントン泊
8/23(火)	ローリー着 Welcome Party 授業参加 (自己紹介を含む)
8/24(水)	通常授業参加 日本の文化紹介 (8年生対象) 引率教諭による授業 (8年生対象)
8/25(木)	校外学習 (カヌーイング) 日本の文化紹介 (7年生対象) 引率教諭による授業 (7年生対象) 教員間ミーティング
8/26(金)	通常授業参加
8/27(土)	ホストファミリーとの活動 Sayonara Party
8/28(日)	ローリー観光 ホテル泊 ※ハリケーンにより急遽日程を変更
8/29(月)	ローリー発 サンフランシスコ着 ホストファミリーとの活動
8/30(火)	通常授業参加 ホテル泊
8/31(水)	サンフランシスコ発
9/1(木)	帰国

3) リサーチクエスチョン

リサーチクエスチョンの作成にあたっては、日米の習慣や文化の違いが「ものの考え方の違い」によるものではないかという仮説を立てた。「ものの考え方」を知ることによって習慣や文化についてより深い理解を図り、3月のExploris来日交流や来年度の交流に活用することを目的とした活動である。今回は3つのカテゴリー(生活, 責任感, Assertion)で質問を考えた(表3)。リサーチクエスチョンの結果を集計・分析し、10月の渡米交流報告会で全校生徒にスライドを使って報告した。

表4の結果から、「人とものものを考えた行動」

表3 カテゴリーごとの具体的な質問内容

カテゴリー	質問内容
生活 ①待つこと	・レジに店員がいないときでもあなたは待ちますか ・待つことが嫌いですか
②Lady's first	・Lady's firstをしますか ・アメリカでは男性はみんなLady's firstをしますか
③家での靴の扱い	・家で靴を脱ぎますか ・家でいつ靴を脱ぎますか
責任感	・待ち合わせによく遅れますか ・待ち合わせに遅れたとき、責任を感じますか ・期限を守りますか ・時間を守ることは大切ですか
Assertion	・あなたは積極的にものを言いますか ・いろいろな状況や人でも自分の意見を言えますか ・反論されたらどう思いますか ・自分の意見が間違っていないかどうかを心配しますか

表4 リサーチクエスチョンのまとめ

カテゴリー	分かったこと
生活 ①待つこと	・待つことは好きではないが、自分のこと以上に相手のことを考えて待つことが多い
②Lady's first	・礼儀の1つである。 ・相手のことを考えて行動・生活している
③家での靴の扱い	・基本的には、家で靴を履く ・靴を履かない家庭が増えている ・家を清潔にしようとする意識 ・誰もが気持ちの良い環境づくり
責任感	・期限や約束を守る人が多い ・自分の行動に責任を持っている
Assertion	・積極的に自分の意見を言う ・個人の意見を尊重している ・自分や他人の意見を第三者の視点から見ている

を日常の学校生活から行っていくことが、3月のExploris来日交流や来年度の交流に活かされるのではないかと渡米した生徒は提案した。具体的には、次の3点を行動の指針として報告会で挙げた。すなわち、①自ら

すすんであいさつすること、②自分の思いや考えを言葉で直接伝えること、③生活するのに気持ちの良い環境をつくるために、清掃活動を充実することである。

4) 成果と課題

2010年度から、リサーチクエストを通して、その後の交流に活かす形をとっており、リサーチクエストの目的が明確になった。そのため、渡米した生徒対象の渡米後の研修会においても、渡米して分かったことを報告しようという姿が見られ、本校を代表して渡米交流に参加しているという意識が強まったと判断できる。また、報告会を通して、全校生徒の国際理解が深まり、今後の交流に目標を持って日々の生活を過ごす意識を醸成することができている。

課題は、リサーチクエストの結果から提案した内容が、渡米したからこそ得られた情報によるものとは言えない点である。例えば「待つこと」のアンケート結果を見れば、Exploris, Odysseyの生徒にかかわらず、日本人が同じ考えを持ち、行動しているもののようにとらえることもできる。「待つこと」の根本的な理念が「ものの考え方の違い」から起因しているのかどうか判定不能である。事前研修会において、「ものの考え方の違い」の定義が渡米した生徒の中で、理解できていなかったことが分かる。来年度は、リサーチクエストのテーマを生徒がしっかりと把握できるように、テーマの理解に十分な時間を取る必要性を指摘できる。

4. アンケート内容・結果と考察

本校（74名）と三原中（77名）の3年生を対象に、次の内容のアンケートを実施した。アンケートは5段階尺度とし、5を「大変あてはまる」、1を「全く当てはまらない」とした。アンケート内容は次の通りである。

- ①英語は国際交流に欠かせないと思う
- ②難しいことや苦手なことに進んで取り組もうとしている
- ③ジェスチャーなどは大切ではない
- ④外国の文化や考え方を知ることが大切である
- ⑤自国の文化や考え方をよく知っている
- ⑥どんな場面でもいろいろな人と積極的にコミュニケーションを取ろうとしている
- ⑦色々な人の思いや考えを受け止めることができる
- ⑧言葉の違いを気にせずにつきあうことができる
- ⑨外国の文化や考え方をよく知っている
- ⑩色々な人の思いや考えに対して、自分の思いや意見を言うことができる

- ⑪外国人と英語を話すことは楽しい
- ⑫自国の文化や考え方を知ることが大切である

次に、アンケート結果を示す。表5は本校で行った2回のアンケート結果、表6は渡米した生徒、本校（10月）、附属三原のアンケート結果である。

表5 アンケート結果（本校）

項目番号	7月	10月
1	4.52	4.58
2	3.56	3.59
3	1.58	1.54
4	4.33	4.46
5	3.42	3.36
6	3.49	3.39
7	3.70	3.69
8	3.48	3.49
9	2.71	2.76
10	3.55	3.57
11	3.73	3.80
12	4.37	4.47

表6 アンケート結果（渡米生徒・本校・三原中）

項目番号	渡米生徒（10月）	東雲（10月）	三原中
1	4.86	4.58	4.03
2	4.29	3.59	2.96
3	1.14	1.54	1.70
4	4.86	4.46	4.06
5	3.86	3.36	2.90
6	4.14	3.39	2.91
7	4.43	3.69	3.26
8	4.43	3.49	3.22
9	3.71	2.76	2.49
10	4.00	3.57	3.01
11	4.57	3.80	2.86
12	4.86	4.47	3.87

表5の数値を比較すると、MENDOYOとの交流と渡米交流のあとでも優位な変化は見受けられない。しかし、表6の数値を比較すると、それぞれに数値の差が確認できる。質問項目①については、年間3回姉妹校が来日することもあり、コミュニケーションツールとして英語の必要性を感じている生徒が多い。また、渡米した生徒は渡米先でのコミュニケーションで難しさを感じた結果がうかがえる。質問項目②については、国際交流でコミュニケーションにおいて困難やもどかしさを感じた生徒がそれを乗り越えようとする意識が強くなっていることが分かる。質問項目⑫については、姉妹校の生徒とのやりとりで、日本の文化等について、うまく伝えられなかったり、よく分かっていなかった

りしたことから、その必要性を感じ、数値が高くなっていることが分かる。

以上のように、本校における国際交流を通して、生徒は言語・コミュニケーションに対する意識と自己理解で非常に高い水準を保っている。その要因として、年間3回の来日交流と1回の渡米交流で姉妹校生徒と実際に接することで、自らの課題を発見し、次の交流に向けて準備をしようとするのが考えられる。実際、大半の生徒が来日交流で自分の思いや考えを伝えるために、交流が近づくにつれてそれぞれで学習している。

今年度はMENDOYOとの来日交流、Exploris、Odysseyとの渡米交流の2つを行った。MENDOYOとの交流は、2日間のみ交流だが、総合的な学習の時間における意見交換会、MENDOYO生徒が披露するインドネシアの伝統舞踊など、本校生徒にとって異文化を十分に体験できるものとなった。その影響もあり、7月のアンケートでは、どの項目についても高い数値となっている。Exploris、Odysseyとの渡米交流では、8名のみ参加で、全校生徒が体験できない交流であるが、リサーチクエスチョンを続けるExploris来日交流に生かせるよう位置づけた結果、渡米した生徒だけでなく、全校生徒にも影響を与えている。どの交流においても、英語を基本としたコミュニケーションを実際に行うことで言語・コミュニケーションに対して難しさやもどかしさを感じ、それらを解消するために、英語科での学習だけでなく、自ら学習を進める生徒もいる。そうした点で、言語・コミュニケーションに対する意識が高くなっている。

また、交流の中で、日本の文化やものの考え方などに新たに気づかされる機会が多いようである。単に英語を話せるという段階では、コミュニケーションの充実が図れないと感じている生徒の多いことがアンケートからも読み取れる。そういう意味で自己理解を深めるきっかけとなっていると考えられる。また、MENDOYOとの交流に先駆けて行った事前学習のような異文化理解を通して、他者理解も深まってきているのではないかと判断できる。

5. おわりに

以上、本校がこれまで行ってきた国際交流プログラムの実践を事例として、本校生徒の言語・コミュニケーションに対する意識と他者理解（異文化理解）・自己理解（自国文化理解）にどのような影響を与えているのか、その成果と課題を明らかにしてきた。

その結果、国際交流を通して言語・コミュニケーションに対する意識と他者理解・自己理解の深まりがアンケート結果と生徒の様子からうかがえた。しかし、交流方法については、検討の余地が多々ある。今回は、生徒の様子に視点を当ててみたが、今後は生徒の変容に考慮しながら、よりよい国際交流プログラムを模索し、実際に取り組んでいきたい。さらに、本校の国際交流プログラムが本校のみで終わるのではなく、他校との交流も視野に入れて考えていきたい。

※1「宮島てらこや（会長 上田宗岡 事務局（株）ディアフォロン）」は、子どもたちと本気で向かい合い、世界遺産の宮島をメインフィールドに、日本・広島・宮島の自然や伝統文化を共に学び体験し、「大人が育つ、子どもが育つ地域づくり」を目指しているものである。

参考文献

- 神原一之. 「表現・コミュニケーション力」の育成を目指した総合的な学習の時間の実践. 日本生活科・総合的学習教育学会第14回全国大会(広島大会) 公開授業活動案・指導案集. 2005. pp.58-63
- 神原一之ほか (a). 中学校における新しい国際交流プログラムの開発—Exploris Middle School・Odyssey Schoolとの交流を通して—. 広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要. 2008. pp.63-68
- 神原一之ほか (b). 中学校における新しい国際交流プログラムの開発Ⅱ—Exploris Middle School・Odyssey Schoolとの交流を通して—. 広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要. 2009. pp.63-68
- 神原一之ほか (c). 中学校における新しい国際交流プログラムの開発Ⅲ—Exploris Middle School・Odyssey School・MENDOYOSMP4との交流を通して—. 広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要. 2010. pp.63-68